CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

いわゆる「人称の関係」について

富田信一

一、はじめに

動詞の人称（personne verbale）の区別が判然としている言語における人称の関係（relations de personne）に相当する事項を、「人称に関して未分化の形式に甘んじている」[1]といわれそうな日本語においては、これをどう捉えているのかその実態を明確にしようとすれば、先ず「人称」という語が日本語に入る以前の状態についての理解が必要になります。何故なら現在の日本語には西欧の言語とともに「人称」「人称代名詞」等の訳語が使われていますが、西欧の言語と日本語との、いわゆる「人称の関係」についての相違が明らかにされないまま使われている場合が多いので、このような状態のままで日本語のいわゆる「人称の関係」について理解しようとすれば、まずその説明に混乱が起ることは自明なことだからです。そこで此小論においては、前論文に引続いて「人称」「人称代名詞」等、「人称」を冠しした語を使わずに、人称の観念が入る以前の日本語について、いわゆる「人称の関係」に相当する事項を明確にしてみることを試みました。

ここに取上げられた「謠本」[2]は、役者たちによって舞台（scène）の上で発話されるための台本（texte）であって、それは読むためのものではありません。そこでこれを、「発話者」（énonciateur）と、発話者によって発話された「発話」（énoncé）と、その「発話の主体」（sujet de l'énoncé）[3]との関係で整理してみることにしました。発話（énonciation）[4]は言語を音として表わすことです（réalisation vocale de langue）。音として表わされるために「掛詞（mots-pivots）[5]が度々使われることになります。つまり、異った二つの形象（images）と概念（concepts）が同じ音を持つことで一種の「音合わせ（calembour）として使われます。例えば「まつ」は「待つ」（attendre）と「松」（pin）と「掛詞」となり、「聞くやいかに。うはの空なる風だにも、松に音する、ならひあり。」

（墨田川）（傍線筆者）と使われます。又、「問答」（dialogue）の中で使われる掛合いの語句、例えば、

つれ〳〵是は他國の物語、ししたる人の業（ごう）により、かくくるしみのうき業（わざ）を、今みる事のふしぎさよ。して「しめる續松（たいまつ）ふりたてて、わき〳〵藤の衣の玉だすき、して「鵜かごを開き取出だし、わき〳〵嶋つ巣おろしあら鵜ども、して〳〵此川浪に、わき〳〵ばつと、して〳〵放せば、同上（歌）〳〵おもしろの有様や。〳〵。底にもみゆるかがり火に、驚くうをを追ひまはし、かづきあげすくひ上げ、隙なくうををくふ時は、罪も、報（むくい）も後の世も、忘れはてておもしろや。（鵜飼）

は、一種の《communion phatique》と見られましょう。これらの事は「謡本」が読むためのものではなく、「発話」されるためのものであることを示しています。しかし、この「しめる續松ふりたてて」が「話手は自己を消去して、非人称の表現を多用する。」（傍線筆者）（Le parlant s'efface et prodigue les expressions impersonelles;）[6] というような説明にあてはまるものかどうか、「人称」という語を使う途端、説明は混迷の霧の中に入りこんでしまいます。そこでしばらくは、「発話者」「発話」「発話の主体」の関係にだけとどまって、いわゆる「人称の関係」に関わる事項を考えてみることにします。

（註）

1）Émile Benveniste, Problèmes de linguistique générale I, Gallimard, 1987(1966).
《Structure des relations de personne dans le verbe》(1946)
2）田中允校註「謡曲集」上、中、下、日本古典全書、朝日新聞社（昭28）
3）Jacques Fontanille, Les Espaces, Subjectifs, introduction à la sémiotique de l'observateur, Hachette, (1989)
《L'observateur dans le discours verbal》
4）Émile Benveiste, Problèmes de linguistique générale 2, Gallimard, 1987,
《L'apparel formel de l'énonciation》(1970)
5）René Sieffert, Théâtre du moyen âge, Nô et Kyôgen, Printemps Été, Publications Orientales de France, (1979)
6）Émile Benveniste, Problèmes de linguistique générale I, Gallimard, 1987(1966).
《Structure des relations de personne dans le verbe》(1946)

二、駒とめて

Le verbe est, avec le pronom, la seule espèce de mots qui soit soumise à la catégorie de la personne.
—Émile Benveniste

今、ここに、藤原定家の「駒とめて袖打はらふかげもなし　佐野のわたりの雪の夕暮」[1]（新古今和歌集、巻第六、六七一）という歌があって、この歌の中で、実際に駒を止めて袖の雪を払う人を(A')とし、この歌をよむ人を(A)とします。すると　A＝A'　の場合と、　A≠A'　の場合と二つが考えられます。定家は萬葉集の「苦しくも降り来る雨か神が崎狭野の渡りに家もあらなくに」[2]を本歌としてこの歌を詠んだといいます。が、定家自身が詠んだ場合のことは一先ず措くとして、謡曲「鉢の木」では有名なこの歌を次のように借用しています。

なう〳〵お客僧御宿参らせうなう。痛はしやもとふる雪に道を忘れ、今ふる雪に前後を亡じて、袖なる雪をうち拂ひ〳〵たたずみ給ふをみて、古歌の心に似たるぞや。下へ駒留めて、袖うち拂ふ陰もなし。「佐野のわたりの雪の夕暮ぐれ。かやうに讀みしは大和路や。へ三輪が崎なる佐野のわたり。同下（歌）へ是は東路の、さのの渡りの雪のくれに、迷ひつかれ給はんより、みぐるしく候へど、一夜はとまり給へや。上（歌）勝是も旅の宿、〳〵、かり初ながら値遇のえん、一樹の陰のやどりも、此よならぬ契りなり。それは雨の木陰、是は雪の軒ふりて、憂ねながらの草枕、夢より霜やむすぶらん。夢よりしもや結ぶらむ。

ここでは、シテ佐野源左衛門常世が歌をよむ人、つまり発話者(énonciateur)（A）であって、発話者（A）は「袖なる雪をうち拂ひ〳〵たたづみ給ふ」人をみているのですから、(A')に擬せられているのは最明寺人道時頼です。つまり最明寺人道、発話の主体(sujet de l' énoncé)（A'）が雪の中で難渋している様子を見て、佐野源左衛門（A）は「駒とめて」の古歌を思い浮かべ、その歌の心に似ていると発話するわけです。これを整理して図示すると次のようになります。

図式（1）

発話者（A）（佐野源左衛門）は（A'）を見てその心を察し定家の歌を思い浮かべる。
←
発話の主体（A'）（最明寺入道）は雪を振りはらう。

A ≠ A'ですが、(A)は(A')の心を察し、それが古歌の心に似ているというわけです。それでは古歌の心はということになります。もし図式(1)を本歌「苦しくも降り来る雨か……」と、「駒とめて……」の間にそのまま適用すると

発話者（A）定家が（A'）を見てその心を察し、「苦しくも降りくる雨か……」を思い浮かべる。
←
発話の主体（A'）難儀をしている人

となるのでしょうが詮索不能です。どうしてこのように誰が駒をとめるか判然としないのかというと、その理由の一つは日本語には動詞の人稱変化がなくて、私がとめるのも彼がとめるのも同じ「駒とめて」であり、特に「発話の主体」についての指示がない限り、動詞は概ね発話者に結びつけられる事が普通だからです。この事を次の例で理解しておくことにします。

わき「……先先養老と名付けそめし謂を委申すべし。して「さむ候是に候は此尉が子にて候が、あさゆ（朝）ふ（夕）は山に入り薪をとり、我らをはごくみし處に、有時山路のつかれにや、此水を何となく結びてのめば、尋常ならず心も涼しくつかれもたすかり、つれへさながら仙家の薬の水も、かくやと思ひしられつつ、やがて家路にくみはこび、父母に是をあたふれば、して〻呑む心よりいつしかに、やがて老をも忘れ水の、つれ〻あさいのとこもおきうからず、よるのね覺もさびしからで、して〻いさむ心は眞清水の、二人〻たえずも老をやしなふ故に、養老の瀧とは申す也。（養老）

ワキ大臣が養老の滝の由来を委して話せというのを受けて、その土地に住む父子の者の父の方が先ず「此尉が子にて候が」と自分の子を紹介します。すると、紹介されたこの「子」がそのまま発話の主体（sujet de l' énoncé）となり、「山に入り薪をとり我らをはごくむ」のです、そして水を何となく結びて飲むのも、心涼しく疲れが助かるのも子の事です。つまり図式(1)です。

図式（1）

発話者（A）シテ尉がA'を見て、その心を察し発話する。
←
発話の主体（A'）ツレ「子」

すると今度は「子が発話する番です。「仙家の薬の水もかくや」と思うのも「父母に是をあたふれば」も発話の主体の指示はありませんから子自身のことです。子が父母に水を与えたのですから当然父がこれを呑み、「老をも忘れ水の」ということになります。以上二つの発話は発話者と発話の主体が同じ場合、つまり A = A' の例です。ところが、次の子の発話「朝いの床もおきうから

ず、よるの寝ざめもさびしからで」は図式(1)です。

図式（1）

発話者（A）子、A'（父）をみて、その心を察し発話する。
←
発話の主体（A'）父

この場合、もちろん A ≠ A' で、発話の主体（A'）父を明示する語はないのですが、A と A' は父子で、ほとんど一心同体という立場に立っているかのように、（A）が（A'）のことを自分自身の事のように語ります。能の問答では全く他人である話手と話相手の間でも図式(1)の発話を交しながら終に両者が同一の境地に到達するのを常としますから、この「養老」の父子の場合、二人が直ちに同一の境地に達し「たえずも老をやしなふ故に……」と二人が同じ発話をするのも当然のことと言えます。

図式（2）

発話者（A）子
←→
発話者（A'）父

二人が同じ境地に達して、同じ発話をする。

このように発話者二人が同じ発話をするのを図式(2)と名付けることにします。

発話者と発話の主体との関係を、今度は父子でなく、たま〳〵出逢った他人どうしの間で考えてみます。

して「跡をとうて給はり候はば、業力の鵜をつかうて御目にかけ候べし。すでに此夜も更け過ぎて、鵜つかふ比にもはや成りぬ。いざ業力の鵜をつかはん。つれへ是は他國の物語、ししたる人の業により、かくくるしみのうき業を、今みる事のふしぎさよ。して「しめる續松ふりたてて、わきへ藤の衣の玉だすき、して「鵜かごを開き取出だし、わきへ嶋つ巣おろしあら鵜ども、してへ此川浪に、わきへばつと、してへ放せば、同上（歌）へおもしろの有様や。〳〵。底にもみゆるかがり火に、驚くうを追ひまはし、かづきあげすくひ上げ、隙なくうをくふ時は、罪も、報も後の世も、忘れはてておもしろや。（鵜飼）

シテ「鵜使い」の亡霊は、ワキ僧がその法力を使って跡を弔ってくれるのなら、殺生の罪で地獄に堕ちてしまった「鵜使い」の業を、今、ここで、お見せしようと言います。ここでワキツレである従僧も、殊更に、これはこの世の事ではなく、他国の話、地獄のことなのだと断わるわけです。こうして「かく苦しみのうき業を今みる事のふしぎさよ」と、シテ、ワキ、ワキヅレの三人ともどもが法力によって始めて見ることができる業力の鵜を使う境地に入ってしまいます。

先ず「しめるたいまつふり立てて」は発話の主体が明示されて

いないので、発話は直接発話者である鵜使いに結びつきます。「ふり立てて」は、まさにしく鵜使いの行動そのものです。次の「藤の衣の玉だすき」も発話の主体が明示されないワキ僧の「相の手」ですが、「藤の衣」は鵜使いが身につけているもので、前述の「養老」の父子が父子ゆえに一体になって子が父のことを発話するのと同様、発話者ワキ僧が発話の主体鵜使いと全く同一境地にいる事を明言することとなります。

図式（1）

発話者（A）ワキ僧、A'と同じ境地にいて「藤の衣」と発話する。
←
発話の主体（A'）シテ、鵜使いの亡霊

A ≠ A'　ですが、こうしてAは次第にA'と同じ境地に入って行きます。すなわち、A（ワキ僧）は「嶋つ巣おろし……」、「ぱっと」と「相の手」を綵返すうちに終にはA'（鵜使いの亡霊）と全く同じ境地に達します。A ≠ A'　であっても、A = A'　の境地にいます。ここは鵜使いの亡霊の境地ですから、もう現実世界での僧の身分は不要です。そこでワキ僧は「地謠」（choeur）と交替します。

図式（3）

発話者（A）、地謠、A'と同一の境地にいて「おもしろの有様や」と発話する。
←
発話の主体（A'）鵜使いの亡霊、Aの発話を効いて鵜を使う。

A ≠ A'　でありながら、A = A'　の境地にあるのは図式(1)と同じですが、Aが「地謠」（choeur）と交替するのでこれを図式(3)で表わします。発話者「地謠」は次の章で詳しく述べる通り、現実界での身分は持たず、A'（発話の主体）を「我」と顧みることのできる間柄にある「大勢」[3]です。このA（地謠）がA'（発話の主体）を「我」と顧みる点に著目します。例えば、「烏頭」では発話者A（地謠）がA'（獵師の亡霊）を見て「我はそとの浜千鳥……」と謠うとき、AがA'を「我は」と呼ぶのは、「われ」が自己を「我」と顧みるのと同じ関係であって、A ≠ A'でありながら、A = A'の境地にあり、しかもAはA'を「我」と呼ぶことができる関係にあります。「鵜飼」の場合ですと、「罪も、報も後の世も、忘れはてておもしろや。」と鵜使いの身を顧みているのは発話者（A）（地謠）であって、鵜を使っているのは鵜使いの亡霊（発話の主体A'）です。AはA'を「我」と顧みるのですが、A ≠ A'　であります。

このようにして、「駒とめて」の発話者（A）佐野源左衛門はこの歌を媒介として、発話の主体（A'）最明寺入道と同一境地に居ようとします。「養老」の父子は「父子」という間柄の故に同一の境地にいて二人が同じ発話をします。さらに、「地謠」はシテ、ワキを含む「大勢」となって発話の主体を「我」と呼びます。いずれの場合も外的には発話者（A）と発話の主体（A'）は別の人なのですが、A = A'　の境地に、到達しようとします。つまり、発話者Aは様々な発話の主体A'について発話しますが、いずれの場

合でも　A＝A'　の境地に立つことが可能であると考えています。A'が誰であろうと発話者（A）はそれと同じ境地に立つことができるのですから、「駒とめて」という発話は、誰が「発話の主体」になろうとも同じ「駒とめて」という発話になるのが普通です。同じように、「身」、「袖」、「心」なども普通は「発話の主体」に結びつく語であって、これに一々「誰の」という指示をしないのが普通です。

又、発話者は自分を中心に置いて外界を見、それを発話する形式をとる場合があります。例えば「烏頭」では獵師の亡霊はふる里の我家を訪れ、我が妻子の姿を垣間見て我子をいとおしもうとします。

してさしこゑ〳〵哀やげにいにしへは、さしも契りし妻も子も、今はうとうの音に鳴きて、やすかたの鳥の安からずや。何しにころしけん。わが子のいとほしいごとくにこそ、鳥けだものも思ふらめと、千世童が髪をかきなでて、あらなつかしやといはんとすれば、……（烏頭）

「髪をかきなでて、あらなつかしやといはんとすれば」は発話者が我子を見てその心をそのまま発話する形式です。ところが一転して今度は今まで発話者だったこの獵師の亡霊を他人の立場から見て発話する形式をとる場合があります。これが図式(3)で発話者は「地謠」（choeur）です。発話者（A）は発話の主体（A'）を「我」と呼びます。但しこれは発話者が自己を振返ってみるときの「我」です。

同上（歌）〳〵わうしやうの、雲の隔かかなしやな、〳〵。今迄見えし姫小松の、はかなやいづくに、こがくれ笠ぞつの國の、和田の、かさ松やみのおの、瀧津なみも我袖に、たつやそとばのそとはたれ。みの笠ぞ隔てなりけるや。松嶋や、をしまの篷屋うちゆかし。我はそとの濱千鳥、ねにたてて、なくより外のことぞなき。（烏頭）

「我袖」、「我はそとの濱千鳥」と今度は発話の主体となった獵師の亡霊を「我」と顧みて発話するのは他者である「地謠」です。以上、A＝A'　でありながら、A＝A'　の境地に到達しようとする諸形式を念頭において、冒頭の「駒とめて」の個所に戻り、René Sieffert氏[4]のフランス語訳を対照して、いわゆる「人称の関係」を中心に考えてみます。但し氏の翻訳の原本となった「謠本」が異なるので語句に多少の相違があることを予め断っておきます。

SHITÉ:

Holà ! Holà ! le voyageur ! Sous mon toit je vous recevrai !
Dans cette neige par trop épaisse, il ne m'entend point, semble-

t-il ! Ah, pitoyable est son aspect! Par la neige qui tout à l'heure tombait, il ne distinguait plus sa route; par la neige qui tout à l'heure tombait, il ne distinguait plus sa route; la neige tombe à cette heure, il a perdu son chemin, et se tient là, de sa manche secouant la neige; de le voir secouant sa manche

voilà qui rappelle le sentiment qu'évoque l'antique poème arrêtant ma monture
pour secouer ma manche il n'est d'abri aucun
au gué de Sano crépuscule de neige

celui qui ainsi chanta était sur les routes du Yamato,
dans les parages de Sano près de la pointe de Miwa

CHŒUR:

Céans sur la route des Marches Orientales
(Le shité va jusqu'au pont.)
au gué de Sano dans le crépuscule de neige
plutôt que d'errer épuisé
(Il pose la main sur le bras gauche du waki.)
encore qu'il soit misérable
pour une nuit acceptez le gîte que je vous offre
(Il baisse la tête. Le waki enlève son chapeau, et pendant le chant du choeur, le shité le premier, tous deux regagnent le plateau.)

最初は「なう〳〵お客僧御宿参らせうなう。」と発話者（シテ、佐野源左衛門）が話相手の旅僧に呼掛けます。ここは呼掛けですから呼掛ける発話者（話手）と、その話相手との関係を作ります。日本語は話相手への発話であることを「お客僧御宿参らせうなう」と敬語を使って表わします。フランス語には動詞の人称変化と人称代名詞があって、《Sous mon toit je vous recevrai !》と話手と話相手との関係を《je》と《vous》で表現します。しかし、この話手の呼掛けが話相手には届きません。つまり話手と話相手との間には問答が行なわれません。旅僧は話相手の位置から離れて他人となり、発話の主体は《vous》から《il》に代ります。すなわち、《son aspect》,《il ne ditinguait plus sa route》《il a perdu son chemin》,《sa manche》です。しかし「駒とめて」の歌の引用は、

arrêtant ma monture
pour secouer ma manche il n' est d' abri aucum
au gué de Sano crépuscule de neige

と今度は《ma monture》,《ma manche》となっています。ここは本歌そのままの引用という形をとっていますから、定家が「私が駒をとめ」、「私が袖の雪を払う」という意をこの歌に込めたのだと訳者は考えているわけです。

一方、日本語では「お客僧御宿参らせうなう」と敬語を使うこ

とによって旅僧が話相手であることが示されれば、そのままその旅僧が「発話の主体」に移行します。つまり「発話の主体」が発話者に対して「話相手」の位置に来れば問答が始まって敬語で扱い、「話相手」の位置から離れれば「発話の主体」に戻ります。「発話の主体」が「話相手」になるかならぬかは「発話者」と「発話の主体」との間の距離によります。又、「袖なる雪をうち拂ひ〳〵たたずみ給ふをみて」と「発話の主体」に対して敬語を使って、これがいつでも「話相手」の位置に戻りうるための配慮も怠りません。このような「発話者」と「発話の主体」との関係を訳文では、《je》《vous》→《je》,《il》→《je》,《vous》で表わしています。[5]

日本語の「身」、「袖」、「袂」、「心」等は誰のものにも所属しない一般的な名詞ですが、発話の中で使われると、普通、「発話者」又は「発話の主体」に直接結びつきます。ですから「駒とめて袖うち拂ふ」を発話者に結びつければ、《ma monture》,《ma manche》の意となりますし、「発話の主体」が「発話者」と別の人の場合には、「発話の主体」に結びつくと《sa monture》,《sa manche》の意となります。しかし「発話者」(A)と「発話の主体」(A')とが別の人であっても、AとA'とは図式(1)では同じ境地に立つことを目指しますから心の面では　A＝A'　となって《ma manche》とか《sa manche》とか言わずに「袖」だけの方が便利です。特に「我袖」とは言っても《sa manche》に相当する日本語の表現はありません。「かの人」[5]はこの場所にいない人ですから、その人に所属する「袖」は発話者には見えないのです。

ここでもう一度「駒とめて」の歌が「鉢の木」で用いられた状況の図式に戻ります。

図式（1）

発話者（A）（佐野源左衛門）はA'を見て、その心を察し
「駒とめて」の歌を思い起こす。
←
発話の主体（A'）袖の雪を払う。

AはA'に呼掛けるのですが、A'には聞こえません、従ってAとA'との間に問答は行なわれず、AとA'は明らかに別々の存在ですが、心の面を考えればA'はAが心に思い描くだけの人です。Aは東路の佐野の渡りの雪の夕暮れに茫然と佇む旅人A'を心に描き、「駒とめて」の歌を思い起します。つまり外面は　A≠A'　で、内面は　A＝A'　である関係にあるAとA'にかかわる「袖」を、あえて《ma manche》とか《sa manche》とかに決めてしまうことは日本語にはできないのです。

「発話者」を中心に置いて「発話の主体」が話相手となる位置に来れば、これを敬語で接待し、話相手の位置から離れれば「かの人」となって終には見えぬ「かの国」へ消え去ってしまう、そしてその跡に残るのは「発話者」である「われ」だけという日本

語と、動詞の人称変化をもち一応どんな形にせよ人称を設定している言語と、この両者を混合して考えると、どうしても混乱が起きます。ところで今度は、今まで発話者であった佐野源左衛門を「発話の主体」に変え、発話者は「地謡」に代ります。つまり、図式(3)です。

図式（3）

発話者（A）（地謡）はA'を見て、A'と同じ境地にいて「是は東路の……」と発話する。

←

発話の主体（A'）（佐野源左衛門）はAの発話を聞き、橋掛の旅僧の許へ赴く。

発話者（地謡）は発話の主体（源左衛門）も旅僧も両方を含めて佐野の渡りの雪の夕暮を眺める立場にいます。つまり「是は東路のさのの渡りの雪のくれに、迷ひつかれ給はんより、みぐるしくは候へど、一夜はとまり給へや。」は佐野の渡りの雪の夕暮、源左衛門、旅僧をすべて含めた状況を見、又、特に源左衛門の心境にも立って発話者（地謡）が発話します。もしこの発話を源左衛門自身がするとすれば、それは源左衛門一人が話しの届かぬ話相手（旅僧）に向って独りごと[6]を言うだけの事ですが、源左衛門とは他者である「地謡」（A）が「発話の主体」（A'）を源左衛門として発話するところに状況の展がりが生れ、又、今まで発話者であった源左衛門が「発話の主体」に変る所に「能」のレアリティが生れて来ることにもなります。地謡（A）は源左衛門（A'）の心を「我が心」として謡い、A'はAとは別の存在として橋掛にいる旅僧の許へ赴く。「一夜はとまり給へや」《pour une nuit acceptez le gîte que je vous offre》は《je》が《vous》に対して直接宿を提供しようというのではありません。つまり発話者（A）（地謡）は源左衛門の代りに発話しているのではなく、「一夜はとまり給へや」という源左衛門（A'）の心を他者として眺める立場にいて発話し、A'は無言のまま旅僧の許へ赴く、ここに「能」の眞実らしさが生まれて来るのです。

（註）

1）久松潜一他、校注、新古今和歌集、日本古典文学大系、岩波書店、（昭33）
2）高木市之助他　校注　萬葉集（一）、日本古典文学大系、岩波書店、（昭32）
3）香西精、世子参究、わんや書店、（昭54）、「下座」
4）René Sieffert, Théâtre du moyen âge, Nô et Kyôgen, Automne Hiver, Publications Orientales de France(1979)
5）Émile Benveniste, Problèmes de linguistique générale I, Gallimard, 1987(1966).《La nature des pronoms》(1956)

三、「興に乗じて」、「身をばげに忘れたり」

——énonciateur et le sujet de l'énoncé

発話者（A）と発話の主体（sujet de l' énoncé）（A'）との関係について次のような分類をしてみます。

(1)発話の主体（A'）が明示されていない場合、

(a)　A = A'

(b)　A ≠ A'

(2)発話の主体（A'）が明示されている場合、

(a)　A = A'

(b)　A ≠ A'

(1)の場合は発話の主体の明示がないのですから、当然　A = A' の場合が多いはずです。　A ≠ A' の場合については、前述のようにAとA'が父子のように一心同体に近い関係にあるとか、AとA'が同一の境地に到達している場合です。従ってここでは(1)については(a)の場合について主に調べてみることにします。簡単な例をあげれば、前出「鵜飼」のシテ鵜使いの亡霊の「しめるたいまつふり立てて」という発話は、「発話の主体」の明示がなく、それだけ短的に直接「発話者」に結びつく発話といえます。このように「発話の主体」の明示がなく発話者そのものに直接結びつく発話をP_0で表わすことにします。前出の例からもう一つあげてみれば、「烏頭」の「何しにころしけん。……千世童が髪をかきなでて、あらなつかしやといはんとすれば。」が「発話の主体」の明示がなく、それだけ発話者であるシテ獵師の亡霊に直接につながります。しかし「発話の主体」（sujet de l' énoncé）が明示されているかいないかを区別することはそれ程截然としていることではありません。「われ」「汝」「それがし」「御身」等のはつきり主体を明示する語が使われていれば別ですが、「袖」「袂」「衣」「身」「心」等が使われている場合には、それが「発話者」に結びつくのか、「発話の主体」に結びつくのかは使われている場合によります。「駒とめて袖うち拂ふかげもなし」のように、この「袖」が発話者の「袖」だというなら、この発話はP_0ですが、「発話の主体」（A'）を発話者と別の人と考えた場合、これはA'の袖なのだと考えるのならこの発話は(2)の例に入ってしまいます。ですから(1)と(2)との分類は説明に順序と整理をつけるためのものであることを予め断っておきます。又、(1)や(2)の分類に入る発話もそれ〴〵色々な場合が考えられますから、それらを一つ一つ調べてみるのが本章の作業で

す。

先ずは(1)の(a)、A＝A' の場合は「ワキ次第」から始めることにします。

(1)　大臣次第〈風も静かにならのはの、風もしづかに楢の葉の、鳴らさぬ條ぞのどけき。(養老)

(2)　〈次第〈花をもうしと捨つる身の、花をもうし捨つる身の、月にも雲は厭はじ。(忠度)

(3)　〈次第〈年立ちかへる春なれや、年たちかへる春なれや、花の都にのぼらん。(軒端梅)

(1)の次第の中には特にこの次第の発話者であるワキ大臣に結びついた表現はありません。すなわち、発話者の存在を考えなければ「風も静かで、楢の葉末の小枝も音を立てぬ、のどかな太平の御代だ。」と、長閑な太平の世を第三者がそのまゝ伝える表現ともとれます。ところが発話者が舞台に立って観客に向ってこれを歌えば、「風も静に」とながめているのは発話者であり、「のどけき」と判断を下すのも発話者ということになります。(2)の「忠度」の場合も同様でワキ僧次第の「花をもうしと」は「花も捨てた身にとっては、月に雲がかかっても厭わぬ。」というのですから、このワキ僧だけに特定した表現ではなく、世捨人一般についての発話ととれます。しかしこれも発話者ワキ僧が言えば「身」は当然発話者に結びつきます。ですから(3)の軒端梅の場合「花の都にのぼらん」は発話者自身のことになるのはもちろんの事です。が、これとても発話者を離れてこの「次第」だけを独立した文としてみれば、特にこのワキ僧に特定されたものではなく「春になったから都へ上ろう」という誰にでもあてはまる文ともなり得ます。これも、「発話の主体」が明示されず、「発話者」に直接結びつく発話ですからP_0です。P_0はもちろん「ワキ次第」に限らず「シテ一声」でも

(4)　(一聲)して一聲〈月もはや、でじほになりて鹽竈の、浦さびまさる、ゆふべかな。(融)

(5)　(一聲)して一聲〈鵜舟にとぼすかがり火の、後の闇ぢをいかにせむ。(鵜飼)

(4)は「月も出、潮もさして来て、夕べの塩釜の浦は一際ものさびしい。」で特に融の大臣だけに特定された表現ではなく、P_0なのですが、これを発話者シテ融の大臣が発話すれば「浦さびまさる」は発話者の判断になります。(5)のP_0は鵜使いの境涯を説べたものですが、発話者がこれを言えば発話者自身のこととなります。つまり発話の主体が明示されない発話P_0の発話の主体(sujet de l'énocé)は発話者自身となります。そこで今度は逆に、発話者に直接結びついてしまうP_0の表現を発話者自身か

ら引離し、発話者と結びつくのを避けるためにはどのようにするのか、その方法の一つとして本歌を使う例を紹介します。

(4)、(5)と同じくシテ一声です。

（一聲）してさしこゑ〳〵人の親のこころは闇にあらねども、子を思ふみちに迷ふとは、今こそ思ひしら雪の、道ゆきぶりに誘はれて、行方いづくとさだむらん。あら定めなの憑みやな。一聲〳〵聞くやいかに。うはの空なる風にも、同〳〵松に音する、ならひあり。（カケリ）

「墨田川」のシテ（母）は行方知れずになった我子を探し求める狂女です。母親が子を思う執念にはどんなに一般的な表現の発話であっても、発話者の思いに結びついてしまうように思えます。そこで、この狂女は先ず「人のおやの心はやみにあらねども　子を思ふ道にまどひぬるかな（後撰和歌集　巻第十五－一一〇二、兼輔朝臣）という堤中納言の歌を、ほとんどそのまま口ずさむことにします。この本歌は「木賊」「藤戸」「百万」「藍染川」等、多くの作品に使われている歌ですから、いわばなじみ深い歌で、それだけ一般的であって、子を思う母の心を特定の個人に捉われずに表現することとなります。つまり、発話者に直接結びつかぬ独立した和歌であり得るわけです。しかも、下の句「子を思ふ道にまどひぬるかな」を避けて「まどふとは」と一応冷静に自己を顧みる表現にかえます。次に、「今こそ思ひ知ら」されてしまっては直接発話者に結びついてしまうので、「思ひ白雪の」と掛詞「白雪」を使い、「春くれば雁かへるなり白雪の　道ゆきぶりにことやつてまし」（古今和歌集、巻第一－三〇、凡河内躬恒）に続け、下の句「道ゆきぶりにことやつてまし」の「ことやつてまし」という願望の表現はやめて「誘はれて」と受動の表現にかえたのも発話者に直接結びつくのを避ける手段となります。つまりここでは二首の和歌をつなぎ合わせて、発話が直接発話者に結びくつことを避けようとしています。つまり発話者自身の発話であるよりも、和歌そのものの境地の方に傾いています。そこで次の「一声」で又、和歌が出ても奇異に当たりません。「きくやいかにうはの空なる風だにも　松に音する習ひありとは」（新古今和歌集、巻第十三－一一九九、宮内卿）の上の句をそのままシテが歌えば、「聞くやいかに」は発話者であるシテ自身のこととともなり、又この宮内卿の和歌の上の句でもあります。そこで下の句「まつに音する習あり」と断定した表現にかえ、さらに発話者が「シテ」から「地謠」(choeur)に代ります。つまり発話が発話者シテから独立している和歌ですから、この和歌の境地を共にする人であれば下の句をシテ以外の人が言っても一向に差支えありません。又、上の句が「聞くやいかに」と「聞く」が発話者であるシテに結びついていますから「待つに音する」というシテの境地は、他者としてシテ

を眺める「地謠」が発話する方がシテを含めたこの場の状況を第三者の立場から公平に伝えます。もし、「待つに音する」までもシテが発話するとするれば「待つ」は発話者に直接結びついて、発話者自身だけに関わるP_0の発話になってしまいます。ここに発話の主体（sujet de l' énoncé）となったシテ母のことを、発話の主体とは他人である地謠(choeur)が発話者(énonciateur)となることの意味があります。図式(3)です。

図式（3）

発話者（A）地謠はA'と同じ境地にあって「待つに音する」と発話する。

←

発話の主体（A'）シテ母、Aの発話を聞いて「カケリ」を舞い狂う。

「待つに音する習ひあり」は此章冒頭に掲げた分類によると、(1)（発話の主体が明示さない場合）の(b)　A ≠ A'　の例となります。AとA'とは別の存在ですが、同一の和歌をAとA'とで分けて発話するのですから、AとA'はまさしく同一の境地にいます。すなわち、A（地謠）はA'（シテ、母）の心境を「持つに音する習ひあり」と、あたかも自己をかえりみるようにA'の心を眺めて発話します。この場合、発話の主体に直接結びつく語は「掛詞」の「待つ」（松）だけです。もちろん、発話の主体を明示する語があればAとA'との関係がもっと明瞭になるのでしょうが、此の場合、AとA'とが発話するのが同じ和歌の上の句と下の句であるためにAとA'とが同一の境地に立てるのであって、和歌の効用の方が優先しています。

ところで、此章の標題「興に乗じて」「身をばげに忘れたり」に戻って、「身をば」の「身」は発話の主体を明示する語ですが、これについては次に述べることとして、「興に乗じて」が直接発話者に結びつくP_0の発話であって、発話者の意をそのまま直接に言い表わしているので、発話者の存在を明確に示す役割を果していることは、先にあげた例、「しめるたいまつふり立てて」（鵜飼）、「何しにころしけん……」（烏頭）と同種のP_0である事を確認しておいて次に移ります。

(2)発話の主体（A'）が明示されている場合

(a)　A = A'

発話者自身が自己を語る場合です。自己を表わす語としては「身」とそれを更に限定した「此身」「わが身」等があります。又、「ころ」「袖」「衣」「袂」等が「身」に付随するものとして加えられることがあり、一方「われ」は自己を他から区別する意も含めて自己を顧みるのに使われる語です。このように発話者と発話の主体が同じで、つまり　A = A'　で、A'を明示する語が含まれてい

る発話をP_1で表わすことにします。P_1の代表的なものにシテ「さしこゑ」があります。

して一聲へ月もはや、でじほ(出汐)になりて鹽竈の、浦さびまさる、ゆふべかな。さしこゑへみちのくはいづくはあれど鹽がまの、恨みて渡る老が身の、よるべもいさや定めなき、心もすめる水のおもに、照る月なみをかぞふれば、こよひぞ秋のも(最)中なる。勝やうつせば鹽がまの、月も都の、もなか(最中)かな。下(歌)へ秋はなかば身はすでに、老いかさなりてもろしらが(諸白髪)、上(歌)へ雪とのみ、積りぞきぬ年月の、〳〵、春を迎へ秋をそへ、しぐるる松のかぜまでも、わがみの上とくみてしる。鹽なれ衣袖寒き、浦半(うらわ)の秋のゆふべかな。うら半(わ)の秋の夕かな。

「老が身」「身」「わが身の上」と「身」を使い、らさに「身」に関わる「こころ」「衣」「袖」も添えています。ここに使われている「身」は他ならぬ「わが身」であることは明らかですから、P_1の発話です。一方、「みちのくはいづくはあれどしほがまの　浦こぐ舟のつなでかなしも」(古今和歌集、巻第二十―一〇八八、東歌)を本歌として借りて「塩釜の浦」を発話者から鮮明に引離して表現します。更に、心には「澄む」に「住む」をかけて「心もすめる水の面に」に「水のおもにてる月浪をかぞふれば　こよひぞ秋のもなかなりける」(拾遺和歌集、巻第三―一七一、源したがふ)を本歌として続け、「心」を仲秋の名月の境地に遊ばせています。前述のように本歌は「身」や「こころ」を発話者自身から引離すのに使われています。こうして「勝やうつせば鹽がまの」と融の大臣がみちのく塩釜の景を六条河原院に移した事実を説べたあと、「身」とそれに付隋する「衣」「袖」は、もともと発話者と離れた自然の中の「物」なのですから、そのまま天地自然の中の一部となり、「雪とのみ積りぞ来ぬる年月の」と、発話は「美しいと信じた自然現象に、人間生活を合體させようとした」(折口信夫)[1]という言葉がそのまま思い出される美文となり、しかも「衣」も「袖」も「身」も仲秋のみちのくの浦わの自然の中に埋没されてしまいます。自己が自然の中に埋没しているP_1の発話と言えましょう。

一方「わが身」の「われ」は他から自己を区別する語です。例えば「我みほのまつばらにあがり、四方のけしきを眺むる處に」(羽衣)の「我」をとってしまって唯単に「みほのまつばらにあがり」と漁夫白龍が言えば「あがり」という動詞は直接に発話者に結びつき、前述のP_0の表現となって自己を振返る表現ではなくなります。同様に「わがみの上とくみてしる」はわが身を振返る表現で、しかも「くむ」は「汲む」と掛けて「鹽なれ衣」に続き自然の中に埋没して行きます。このように「身」が発話者から離れて自然の中の一部となって、その中に埋没する表現を目指すときに、発話を発話者から引離すのに使われ方法の一つが「掛詞」です。

(眞の一聲)尉男一聲へ年を經し、みののお山の松陰に、猶すむ水の、緑かな。つれへ通ひなれたる老の坂、二人へのぼるも安き、心哉。

「年を経し、み（身）」と言って「身」がそのまゝ直接に発話されれば完全にP_1の発話となります。ところが「身」は「美濃」と掛詞になります。つまり「みののお山」です。発話の主体である「身」は「美濃のお山」の中に隠れてしまいます。しかし、「身」を隠してはいるというものの「年を経し身」ではあるのです。次は「みののお山の松陰に」で「松」と「待つ」を掛けてみることもできます。その時「待つ」の主体は「みののお山」であって発話者ではありませんから発話者と直接結びつくことはないのです。「猶すむ水」は「住む」と「澄む」を掛けます。「住む」は直接発話者に結びつくので「澄む水」の中にかくしました。これはP_0の表現のところで説べたのと同じです。こうして「年を経た身が美濃のお山の松陰に今もなほ住んでゐるが松陰を映す澄んだ水の緑も美しいことだ」ということとなり、老の身は発話者から離れて自然の景の中に埋没することになります。このように発話が発話者から離れているからこそ、次の「通ひなれたる老の坂」の発話が図式(1)の型をとることができるわけです。

図式１－（１）

発話者（A）（ツレ、孝子）A'（父）
の心を察して「通ひなれたる」
と発話する。
発話の主体（A'）（シテ尉、父）

「老の坂」とあるから、明らかにシテ尉が発話の主体なのですが、前の発話がシテ尉から離れていることと、発話者(A)と(A')とが父子の関係にあることが図式(1)の発話を可能にします。又、図式(1)は図式(2)に移行します。

図式（２）

発話者（A）（孝子）
←→
発話者（A'）（父）

父子が同一の境地にあって同一の発話をする。

父子は　A ≠ A'　でありながら　A = A'　の境地にあって二人一緒に「のぼるも安き心哉」と発話します。この父子のように発話者（A）と発話の主体（A'）が　A ≠ A'　であっても、孝子とその父というように限りなく　A = A'　に近い間柄であれば一心同体になってAもA'も二人で同じ発話をする図式(2)が起り得ます。又、前章冒頭の「鉢の木」の例でも、発話者（A）佐野源左衛門はAから離れて雪の中で難儀している最明寺入道（A'）を望見して発話するのですから、A'はAが心に描く人物であって現実に目

の前にいる人物ではありません。このように　A ≠ A'　であっても、AとA'が一心同体とか、AがA'を自分中心に思い描く場合は、発話が発話者中心となって現実感に不足を生ずる結果になります。

しかし「鵜飼」の場合のように、ワキ僧の法力によって此世のものでない他国の地獄の物語を今、目前に見る「ふしぎさ」の中にいる時、ワキ僧（A）と業の深い鵜使いの亡霊（A'）とは明らかに　A ≠ A'　であり、その全く違う存在の二人が同一の境地にあって、現実界にいるワキ僧がシテ鵜使いを発話の主体としてみながら「藤の衣の玉だすき」と囃すところに迫り来る現実感が生れて来る訳です。つまりP_1の発話にあっては発話者（A）と発話の主体（A'）が　A = A'　である場合も、A ≠ A'　である場合でもAとA'がA中心に表現されてしまうとどのように発話を発話者から引離して表現してもそれは発話者を中心とするものになって現実感が乏しくなります。ここに、現実世界に身分をもつワキと、事件（événement）の報告者（informateur）[2]であるシテとが現実世界の「今」、「ここ」で行う問答がどうしても必要となる訳です。

先ず順序としてワキ僧が舞台に登場するところから「融」の能を説明してみます。「是は諸國一見の僧にて候。」（融）の「是」は、現実界に僧という身分を持つ発話者（A）ワキ僧が話相手を想定し、自分ばかりでなく話相手の視点からも「コレ」と指示できる今ここの場所で発話しているわけです。つまり、ワキ僧は舞台正面に向いて名宣りますから相手が誰であるかは措いて、ともかく「是は」は「あなたが今ここに御覧になっているこのものは」[2]の意です。

さて、ワキの道行が済んでシテ融の大臣の化身が登場し、前述のようにP_1の表現をとって「シテ登場」をすませます。ここで現実界に身分をもつワキ僧と事件（événement）の報告者（informateur）である前シテ（融の大臣の化身）との問答が始まるわけです。

わき「いかに尉殿。御身はこのあたりの人にてましますか。して「さん候此浦の鹽くみにて候。わき「ふしぎやなここは海邊にてもなきに、鹽汲（しほくみ）とは誤りたるか尉殿。して「あら何ともなや。扨爰をばいづくとしろしめされて候ぞ。わき「さん候此（この）所を人にとへば、六條河原の院とかや申し候よ。して「されば其河原の院こそ鹽竈の浦候よ。みちのくの千鹿のしほがまを移されたる、都のうちの海邊なれば、へ名にながれたる河原のゐんの、河水をもくめ池水（ちする）をもくめ、爰鹽がまの浦人ならば、鹽くみとなどおぼさぬぞや。わき「げに〳〵陸奥（みちのく）のちかの鹽竈を都の内に移されたるとは承り及びて候。扨あれなるは籬（まがき）が嶋候か。して「さん候あれこそ籬がしま候よ。融のおとど常は御舟を寄せられ、御酒宴の遊舞さま〴〵なりし所也。や。月こそ出でて候へ。わき「勝勝（げにげに）月の出でて候ぞや。おもしろやあの籬が嶋の杜（もり）の梢に、鳥の宿（しゅく）しさへづりて、四門にうつる月影までも、へ古秋にかへる身の上かと、思ひ

出でられて候。して「只今の面前のけしきを、遠き故人の心まで、お僧の御身にしらるるとは、若もかたうが詞やらん。鳥は宿す池中の樹、わき〳〵僧は扣く月下門、して〳〵推すも、わき〳〵敲くも、二人〳〵故人のこころ、今目前の秋暮にあり。同上（歌）〳〵勝やいにしへも、月にはちかの鹽がまの、〳〵、浦半秋も半にて、松かぜも立つなりや、霧の、籬の嶋がくれ、いざ我も立ちわたり、むかしのあとをみちのくの、千鹿のうらわをながめんや。ちかの浦わをながめんや。

問答の始めには「コ」のつく語が多く使われます。「このあたりの人」「此浦」「ここは」「ここをば」「此所」等です。つまり、話手と話相手が今現実の今ここの場所を共有していることを強調しているわけです。又、互いに相手の存在を意識して「コ」と共に敬語を使って話を進めます。二人とも互いに二人の身分については判然としないので敬語を使うわけですが、最初はワキ主導で問答が始まります。つまり「御身はこのあたりの人にてましますか。」とか、「誤りたるか尉殿。」とか、ワキがシテの身分を明かそうとします。ところが、「爰をばいづくとしろしめされて候ぞ。」あたりからはシテ主導に代り、「鹽くみとなどおぼさぬぞや。」からは完全にシテがワキを導いて話を進めることになります。そして「や。月こそ出でて候へ。」と「月」を媒介にして二人が「鳥宿池中樹、僧敲月下門」という賈島の詩の境地を共有する状況に入るわけです。そして図式(2)の発話に達します。

図式（2）

発話者（A）（シテ尉）	同一の境地に遊んで、「故人のこころ、今目前の秋暮にあり」と	
発話者（A'）（ワキ僧）	発話する。	

シテ融の大臣の亡霊は、ワキ僧との問答を通じて、現実界の人「ワキ」を賈島の詩の境地に誘い入れました。シテは六条河原の院が廃墟となっている現実をしばしの間でも忘れ、仲秋の月とともに「いにしへ」の塩釜の景に戻ろうとします。こうして「勝やいにしへも」の「上歌」から現実界をしばし離れるわけですから現実界に身分をもつワキ僧の役目はなくなります。ところで、この上歌の境地をP_0にせよP_1にせよもしこれをシテが発話すればその発話は発話者であるシテに結びつきます。しかしこれを地謠(choeur)が謠えばこの発話はシテから離れて、しかも、発話者（地謠）はシテを見て「いざ我も立ち渡り」と謠うのですから、発話の主体であるシテを「我」と顧みる立場にいるわけです。

ここで「地謠」が置かれている諸条件を整理してみることにします。(1)、シテ、ワキを含めてこの二人がいるのと同じ状況にいる「大勢」の人。(2)、シテ自身を「我」、「身」と呼ぶことができる。(3)、僧、大臣、神官というような現実界の身分はもたない。

図式（3）

発話者（A）（地謡）A'と同じ境地にあって「いざ我も」と謡う。

←

発話の主体（A'）（融の大臣の亡霊）

すなわち、地謡が「いざ我も……」と謡うとき地謡はシテから離れ、シテの「我」を自己として顧みているわけです。

シテ融の大臣と地謡は別々に離れて舞台にいますから外的状況としては完全に　A ≠ A'です。しかしAもA'も同じ境地にいます。しかもAはA'を「我」と呼びます。もしここで、A'が「いざ我も」と発話すれば、それはA'個人が自己を「我」と顧みるだけのことでそれはA'自身だけの範囲にとどまります。しかしA'も含めた状況の中でA'を見ている大勢が「いざ我も」と発話すれば、この「我」はA'ばかりでなく大勢が認める「我」であるわけです。もしA'個人が「我」を発話すれば、「我」を振返るAとA'との心理的な距離もA'自身の中にだけとどまる訳ですが、地謡が「我」と振返るときはAとA'との間の距離は　A ≠ A'　ですから、A'の外にまで展がります。つまり「いざ我も立ち渡り」という発話者（地謡）が発話の主体（シテ）を「我」と呼ぶ発話は、発話者自身が自己を「我」と呼ぶ距離を、地謡（A）と発話の主体（シテ）との間にまで展げたものです。この関係は「地謡」ばかりでなく、次のような「語り」の中でも同じように考えられます。

商「いかに船頭殿に申すべき事の候。わき「何事にて候ぞ。商「向ひにあたつて念佛の音の聞え候何事にて候ぞ。わき「あれは人の弔ひに大念佛を申し候。あの念佛について物語の候を、此舟のむかひにつかうずる間にかたつて聞かせ申し候べし、扨も去年三月十五日。や。しかもけふにて候ひし。みやこの者とて年十二歳ばかりなる幼き者を人あきびと奥へつれて下り候が、此人ならはぬ旅のつかれにや、路次より似外に違例し、此川岸にひれふし候ひしを、なんぼう世には不得心なる者の候ひけるぞ。今を限りとみえたる幼き人をば捨て置き、商人は奥へくだりて候。さりとも〳〵と思ひつれども、彼人ただ弱りに弱り既末期に及び候ほどに、餘にいたはしく存じふる郷を尋ね申して候へば、今は何をかつつむべき、我は都北白河、父の名字は吉田のなにがしと申しし人の只一子にて候が、去ことありて父に後れ参らせ、母一人にそひ奉り候ひしを、人商人我をいざなひ此國までつれて下り候。さだめて我は此病中にて空しく成り候べし。我むなしく成りて候はば此路次の土中につきこめて給はり候へ。それをいかにと申すに、まことは都の人の足手影までもなつかしう候程にか様に申し候。ただ返々も都にましますに母ごの御事をこそ、何よりもつて戀しく候へとて、弱りたるいきのしたにて念拂四五返となへ終にをはりて候。さりともと思ひしかども、生死の習ひ空しく成りて候間、遺言にまかせ此路次の土中に築きこめ、しるしに柳を植ゑて候。今月今日が正命日に相あたりて候程、に、所の人より集まり大念

拂を申され候。此船中を見申すに、せう〳〵都旅人も御座候ごさめれ。哀大念佛を御申しあつて御弔ひあれかし。や。長物がたりに舟がつきて候。

「墨田川」で梅若丸の一周忌の大念仏が行なわれているその日に、渡し舟に乗合わせた客たちに船頭が語る梅若丸の末期の物語です。「あれは人の弔ひに大念佛を申し候。」と断っていますから、梅若丸の弔いに土地の人々が大勢集まって念仏を唱えているその声が舟の中まで聞えて来るわけです。そして「あの念佛について物語の候を」と言うのですから、これは物語の語り手である船頭個人と梅若丸との間の話ではなく、今、大念仏に加わっている大勢（船頭も含めて）が梅若丸の最期について認めている話しであることは明らかです。

先ず、梅若丸がここ墨田川に辿りつき、病気に罹るまでの経緯が説明されます。「此人ならはぬ旅のつかれにや」、「此川岸に」「今を限り」と「今」「ここ」が強調されるのは「問答」の場合と同様現実感を高めるためです。「此人」の病いはそれでも何とか治るのではと思っている中に、「彼人ただ弱りに弱り」と「彼人」に変ります。発話を発話者自身から遠去けて「語り」の世界に入る準備です。「彼人」の末期に及んで「餘りにいたはしく存じふる郷を尋ね申し」たのは、上述のように船頭個人ではなく梅若丸の最期に立ち会った「大勢」の人々で、その人たちが今、大念仏に参加しているわけです。もちろん、その中に船頭も含まれます。そこで、今はの際に臨んで梅若丸はその大勢の前で身許を明かす事になります。その開口の表現が「今は何をかつつむべき」という定まりの文句になるわけです。そして梅若丸は「我は都北白河」、「人商人我をいざなひ」、「さだめて我は此病中にて」、「我むなしく成りて候はば」と「我」と呼ばれます。つまり、梅若丸の最期に立ち会った大勢の人々の中の誰もが梅若丸を「我」と言い表わしてもいい訳で、ここでは船頭が「大勢」になりかわって梅若丸を「我」と言ったわけです。

図式（1）

発話者（A）（船頭）梅若丸になりかわって「我」と発話する

発話の主体（A'）梅若丸

「図式(1)」としましたが、船頭は「大勢」の中の一人ですから「図式(3)」の変形とみることもできます。「語り」の中で「我」と自己を振返る主体は梅若丸なのですが、梅若丸の最期を見守った大勢の人が梅若丸になり代れるわけで、船頭が「我」と発話するとき、それは梅若丸でもあるし、船頭自身でもあるわけです。つまり外的な状況では　A ≠ A'　ですが心境としては　A = A'　であります。又、Aは船頭でもあるし、「大勢」でもあり得ますから「図式(3)」とも見ることができます。

ここて（A'）の梅若丸はもう死んでいて、舞台の上には居ませ

んから発話者（A）は（A'）になり代りやすいわけですが、事情によってはA'の境地が極端であり、又A'地身が舞台にその姿を見せている場合もあります。つまり、AはA'になり代りにくい場合です。そういう場合の例をあげて見ます。

　してさしこゑ〳〵哀やげにいにしへは、さしも契りし妻も子も、今はうとうの音に鳴きて、やすかたの鳥の安からずや。何しにこころしけん。わが子のいとほしいごとくにこそ、鳥けだものも思ふらめと、千世童が髪をかきなでて、あらなつかしやといはんとすれば、同上（歌）〳〵わうしやうの、雲の隔かかなしやな、〳〵。今迄見えし姫小松の、はかなやいづくに、こがくれ笠ぞつの國の、和田の、かさ松やみのおの、瀧津なみも我袖に、たつやそとばのそとはたれ。みの笠ぞ隔てなりけるや。松嶋や、をしまの篷屋うちゆかし。我はそとの濱千鳥、ねにたてて、なくより外のことぞなき。

「鳥頭」のシテ獵師の亡霊は生前、殺生を成業としたその罪のため、立山地獄に墮ちましたが、ワキ僧の媒で、みちのく外ヶ浜にいる妻子の許を訪れることができます。しかし獵師の亡霊には妻子のいる家の外から我子の姿が見えても雲が邪魔をして、それに近寄ることができません。すなわち「松嶋や、をしまの苫屋うちゆかし。我はそとの浜千鳥」なのです。

図式（3）

発話者（A）（地謠）、A'と同じ境地にあってA'を「我」
←　と発話する。
発話の主体（A'）獵師の亡霊

　AはA'と同じ境地にあるとはいいますが、殺生を生業とした罪のため地獄に墮ちた亡霊が故郷の妻子の家を訪れるという設定は、「墨田川」の拐わかされた子供の死という現代にも通用しそうな母子の話と違って、かなり特殊な境地と言えます。つまり発話者AはA'を我と呼びはするものの、AとA'とは心理的にかなり離れています。同じ「我」を使うP_1の表現であっても「墨田川」の梅若丸は身近にいますが「鳥頭」の獵師は雲の彼方です。しかし、どちらの場合も「大勢」が「我」と呼ぶことを認める範囲内の状況であるわけです。さて、A≠A'でAはA'を身近の位置に置くこともできるし、又、発話者Aから引離した位置に置くこともできるとすれば、A'をAの話相手の位置に置くことも可能になるわけです。同じ境地にあるAとA'が、AはA'を「我」と呼ぶ関係を維持して、話手Aが話相手A'と歌で「問答」[3]とする。これが「ロンギ」です。

　わきへみどりの空もかげ深き、野山に續く里はいかに。してへあれこそ夕されば、わきへのべの穐かぜ、してへ身にしみて、わきへうづら啼くなる、してへ深草山よ。同下（歌）へ木幡山

ふしみ(伏見野)の竹田、よど鳥羽もみえたりや。ろんき上へながめやる、そなたの空はしら雲の、早暮れそむる遠山の、嶺も木ぶかく見えたるは、いかなる所ならん。してへあれこそ大原や、をしほの山もけふこそは、御覧じそめつらめ、〳〵問はせ給へや。同へきくに付けても秋のかぜ、吹くかたなれや嶺つづき、西にみゆるはいづくぞ。して下へ秋もはや、秋も早、半(なかば)ふけゆく松の尾の、あらし山も見えたり。同へ嵐ふけゆく秋のよ(夜)の、空すみのぼる月かげに、してへさす鹽どきも早過ぎて、同へひまもおしてる月にめで、してへ興に乗じて　同へ身をばげに、忘れたり秋のよの、長物がたりよしなや。まづいざや鹽をくまんとて、待つやたごのうら、あづまからげの鹽ごろも、くめば月をも、袖にもちじほの、汀に歸る浪の、よるの、老人と見えつるが、しほぐもりにかきまぎれて、跡もみえず成りにけり。跡をも見せず成りにけり。(中入。狂言、融の大臣の事を語る)

「夕されば野辺の秋風身にしみて　鶉鳴くなり深草の里」(千載和歌集、巻第四－二五九、皇太后宮大夫俊成)をシテとワキが分けて発話するところまでは、現実界に身分を持つワキ僧とシテとの問答であって、この和歌の媒によって一段と昂揚した境地に到達したとはいえまだ現実界です。下間少進によると次のような型をすることになっています。

「深草山」といふ時、脇ノ袖ヲとりて、タツミヨリ、ユビニテヲシへ、(少進聞書)[4]

名所教えを方角に当てて、実際にワキ僧の袖を取り指で教えるというのですから、まぎれもなく現実界の動作です。もちろん発話も拍子には乗りません。しかし「木幡山」からは現実界を離れて拍子に乗った歌と変り、ワキ僧はその現実界での役を終えて地謠(choeur)がこれり代ります。話手である「地謠」は話相手(シテ尉)と同じ一つの境地をたのしみながら歌で問答を続けます。すなわち「ロンギ」です。発話者(地謠)(大勢)(A)は発話の主体(A')(シテ尉)を「我」と呼ぶことができる関係にあるのですから、心の面では、A＝A'です。しかしAは「嶺も木ぶかく見えたるは、いかなる所なるらん。」と話相手であるA'に尋ねます。これに対して話相手シテ尉は、A≠A'であることを際立たせるかのように「あれこそ大原や……猶々問はせ給へや。」と答えます。発話の主体を明示しないP_0の表現を採用し、発話が直接発話者に結びつくようにします。つまり、心の面では　A＝A'なのですが、外から見ると、A≠A'の形をとるわけです。この「ロンギ」を歌う心得として、金春禅鳳は

一、ろんぎは、ひとりうたいを二人してうたふと御心得候べく候。[5]
　　論議　独謡　謡

と書いています。二人が一つの境地にあそんでいるのは京の夕暮で、「西にみゆるはいづくぞ」と地謠が歌いかけると「あらし山も見えたり」とシテ尉がP_0の型で答えるのも相変らず同じ繰返しです。ただ京の夕暮を叙するだけの事だったら特に「ロンギ」という問答の形を採らなくても、図式(1)に倣って発話者Aが発話の主体A'のことを語ってもよいのですが、図式(1)は　A ≠ A'　を特に強調はしません。つまり、AとA'とが同一の境地にいてしかもA ≠ A'　を強調する「ロンギ」の形式を利用する目的が別に存在するわけです。今、AはA'と全く同じ境地にあって夕暮の京都の風光をたのしんでいるのですが、A'は融の大臣の亡霊ですから、やがては消え去らねばならないのです。A'をAから引離すことが必要になる訳です。そのためにはどうしても　A ≠ A'　であることを強調して置かねばなりません。かつて、現実界の人物であるワキをシテと同じ境地に引き入れるために問答という手段を使ったのと同じく、今度は同じ境地にいるシテを発話者から引離すために歌で問答をするロンギの形を使うわけです。そのきっかけとなるのが「月」であるのは「月」が主題で始めから終りまで常に月が見えかくれしているこの「能」には一番ふさわしい媒といえます。すなわち「空すみのぼる月かげに」「ひまもおしてる月にめで」と地謠（A）が二度繰返して月を発話します。特に「月にめで」はP_0の表現で直接発話者に結びつき　A ≠ A'　を強調します。するとシテ尉（A'）も「興に乗じて」と発話者自身に直接結びつく発話で答えます。前述のように発話者の存在を明確にさせておくのです。が、P_0の文型での発話はここまでで、次は一転してP_1の文型で図式(1)の形をとります。

図式（1）

発話者（A）（地謠）A'と同じ境地にあって「身をばげにわすれたり」と発話する。

←

発話の主体（A'）（シテ尉）

AはA'を「身をばげに」と顧みて発話します。つまり、発話者（A）（地謠）は発話の主体（A'）（シテ尉）を「我」と顧みて発話します。AとA'との間には距離があり空間が展がっています。もしここでA'が自分一人だけで「興に乗じて身をばげにわすれたり」と発話したとすれば、A'が自分で我身を振返るだけのことですからその発話の空間はA'だけの範囲の中にとどまります。しかし「興に乗じて」とA'がP_0の表現形式で、直接自分に結びつく発話をしたときA'は明らかにAとは別の人であって問答の話相手だったわけです。A'は独立した人として「興に乗じて」と発話したのです。そしてその存在感はまだA'に残っているのですが、ここで「身をばげに忘れたり」とA'自身のことを今度は自分から離れたところにいる「地謠」Aの発話で聞きます。そこでA'はいわれてはじめて自分がわが身を忘れていたことに気ずき「手ヲ打ツ」型をする

のです。このように、AとA'は離れていて、明らかに　A ≠ A'　であるのに　A = A'　の境地にある発話が進行するところにA'の実在感が生まれて来ます。

そして「長ものがたりよしなや」、「まづいざや汐をくまんとて」、「待つや田子の浦」と発話の主体はまだA'なのですが、A'は発話者Aから次第に離れて行きます。同じ境地にいたAとA'とはその間の距離がはなれて行くにつれて互に関係のない間柄になって行きます。「待つや田子の浦」と「担桶」と「田子の浦」が掛詞になることでA'はます〳〵発話者Aから遠退いて、浦の浪の中に隠れ、「くめば月をも袖にもちじほの」と「持ち」と「望汐」が掛かるようになると、もうA'はAとは全く関係のない一人の「老人」に変ってしまって、夕暮の波間の彼方へかくれて立去ります。つまりA'はAの前から姿を消すわけです。

(註)

1）折口信夫全集（一巻）、中央公論社（昭42）、女房文学から隠者文学へ

2）Jacques Fontanille, Les Espaces, Subjectifs, introduction à la sémiotique de l'observateur, Hachette, (1989)
《L' observateur dans le discours verbal》

3）Tamba Akira, La Structure musicale du nô, Kincksieck, (1974)

4）古川久校訂、下間少進集II、能楽資料集成、わんや書店、（昭49）

5）表章他校注、金春古伝書集成、わんや書店(昭44)「禅鳳雑談」

Relations de personne dans le japonais

Shin'ichi TOMITA

Les formes verbales du japonais ne distinguent en general ni personne ni nombre. Il semble que nous nous contentons souvent de formes indifferenciées quant à la personne. Par consequant dans le japonais, rechercher comment chaque personne s'oppose à l'ensemble des autres et sur quel principe est fondée leur opposition, c'est un probleme assez difficile. Il nous faut d'abord étudier des relations de personne dans le japonais classique. A la suite de l'essai précédent nous allons rechercher les expressions de la personne verbale dans un texte du Nô publié au debut du dix-septième siècle.